

令和2年度 日本赤十字看護大学外部評価実施報告書

実施日：令和3年2月22日（月）

日本赤十字看護大学

目次

I. 外部評価の目的 2 P
II. 外部評価の概要 2 P
1. 日本赤十字看護大学外部評価委員名簿	
2. 本学出席者名簿	
3. 外部評価委員会の進行	
III. 外部評価委員会の内容 3 P
1. 委員長選任・挨拶	
2. 学長挨拶	
3. 本学の現状と課題説明	
4. 意見交換	
(1) 学部間の連携等について	
(2) 自己点検・評価結果の反映等について	
(3) 大学教育と卒後の病院との連携及び地域連携について	
IV. まとめ 10 P

I. 外部評価の目的

本学においては、平成 28 年度から平成 30 年度まで、外部の意見を徴取する仕組みとして、有識者懇談会を開催したが、本年度は、本学における自己点検・評価活動の客観性・妥当性を高め、本学の教育・研究・社会貢献等の諸活動の質を保証し、更なる改善・向上に資することを目的として、規程を整備し、大学評価の受審を見据え、外部評価委員会として、開催する。

今後の中京大学の発展や改善に向けた多面的なアドバイスをいただき、本学の教育研究活動に反映させていくことで、質向上・質保証につなげていくこととしたい。

II. 外部評価委員会の概要

1. 外部評価委員名簿（任期：令和 3 年 1 月 1 日～令和 4 年 12 月 31 日）

・ 渋谷区保健所長	阿 部 敦 子 氏
・ 聖心女子大学学長	高 祖 敏 明 氏
・ 東京都立大学健康福祉学部看護学科長	西 村 ユ ミ 氏
・ 日本赤十字社医療センター 骨髄腫アミロイドーシスセンター長兼輸血部長	鈴 木 憲 史 氏
・ 日本赤十字社医療センター看護部長	川 上 潤 子 氏

2. 本学委員会名簿

・ 日本赤十字看護大学 学長	守 田 美奈子
・ 同 看護学部長	佐々木 幾 美
・ 同 さいたま看護学部長	小 宮 敬 子
・ 同 研究科長	井 村 真 澄
・ 同 図書館長	江 本 リ ナ
・ 同 学務部長	本 庄 恵 子
・ 同 事務局長補佐	関 口 忍
・ 同 入試・広報センター長	井 上 明 宏
・ 同 国際交流センター長	安 部 陽 子
・ 同 地域連携・フロンティアセンター長	野 口 眞貴子 欠席

3. 外部評価委員会の進行

日 時：令和3年2月22日（月） 10：00～12：00

場 所：日本赤十字看護大学（Zoom）

時間	内容	所要時間
10：00～10：05	開会、委員紹介等	5分
10：05～10：10	(1) 本学の概要について (守田学長) ①理念、目的 ②内部質保証の仕組み ③教育研究組織	5分
10：10～10：20	(2) 教育課程、学修成果（教育の実際その成果） ①看護学部 (佐々木看護学部長)	10分
10：20～10：25	②さいたま看護学部 (小宮さいたま看護学部長)	5分
10：25～10：40	③大学院 (井村研究科長)	15分
10：40～10：53	(3) 学生支援 (本庄学務部長)	13分
10：53～11：03	(4) 教育研究環境 (江本図書館長)	10分
11：03～11：08	(5) 学生募集 (井上入試・広報センター長)	5分
11：08～11：15	(6) 社会貢献 ①国際交流センター (安部国際交流センター長)	7分
11：15～11：17	②地域連携フロンティアセンター (守田学長)	2分
11：17～11：57	意見交換	40分
11：57～12：00	まとめ	3分

※ 説明資料については、項目ごとのパワーポイントをもって説明

III. 外部評価委員会の内容

1. 委員長選任・挨拶

関口事務局長補佐から、委員長の選任について諮られ、各委員の了承のもと日本赤十字社医療センターの鈴木憲史氏が選任された。

<鈴木委員長挨拶>

短大の時代から大学、大学院で40年程講義をしてきたこともあり、大学教育に関心をもってきた。皆さんのご意見を頂いて、よりよい大学にしていけたらと思っているので、宜しく願いしたい。

2. 学長挨拶

大変な状況のなか、お忙しいところをお集り頂き感謝申しあげる。

本学に外部評価委員会を設置し、第1回を開催することとなり、本学をさらに改善、発展させるため、本日は忌憚のないご意見を頂きたく、何卒宜しく願い致します。

限られた時間となっており、私どもの説明は駆け足となるが、その後の質疑応答の時間にご質問等を頂ければ有難い。

3. 本学の現状と課題説明

パワーポイント資料に基づき、以下の項目ごとに説明をした。

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| (1) 日本赤十字看護大学の概要 | 学長 守田美奈子 |
| (2) 日本赤十字看護大学 看護学部について | 学部長 佐々木幾美 |
| (3) さいたま看護学部について | さいたま看護学部長 小宮敬子 |
| (4) 日本赤十字看護大学大学院
看護学研究科について | 研究科長 井村真澄 |
| (5) 学生生活について | 学務部長 本庄恵子 |
| (6) 教育研究環境 | 図書館長 江本リナ |
| (7) 学生募集 | 入試・広報センター長 井上明宏 |
| (8) 国際交流センター | 国際交流センター長 安部陽子 |
| (9) 地域連携・フロンティアセンター | 学長 守田美奈子 |

4. 意見交換

(1) 学部間の連携等について<西村委員>

さいたま看護学部が新たに開設され2学部1大学院となり、学部間の連携が教育の質保証につながると考えられるが、それをどのように活かしていくのか質問したい。

コミュニティを重視するさいたま看護学部と、既に教育の蓄積がある看護学部(広尾)はそれぞれ違う柱を持っていると思われるので、両学部の連携によってより教育力が上がるのではと考えた。年報には学生たちが地域への貢献についてやや課題があるということであったが、両看護学部の連携により両方のコミュニティに参加するようなプログラムがあると、その課題を乗り越えられるのではないか。

また、大学院教育については、博士後期課程の在籍者数が多くなっていることが課題となっているとのことであった。研究の内容によっては時間がかかるのは仕方ないが、例えばどのようなコースワークを設置し、水準を維持して、大学院生が自身の修了を見越して計画的に取り組んでいるか気になったところである。東京都立大学でも大学院生が増えた状況に対して、様々なコースワークを設け、入学時から修了を見越した研究活動を始められるような仕組みについて検討した経緯があったことから質問をした。

併せて、図書館(広尾館)は書籍の所蔵等充実した整備がされているとのことであったが、電子ジャーナル等が年々高額化し、その維持と学生の活用とのバランスが課題となっていると思われるが、現状と今後の課題等を伺いたい。

<小宮さいたま看護学部長>

両学部間の連携は重要であるが、本年度は学生間の交流の機会を設けられなかった。教員間については、さいたま看護学部の教員が充足していないこともあり、例えば災害看護学関連科目を専門とする教員が広尾の看護学部在籍していることから、さいたま看護学部へ赴いて同科目や演習を担当し、また、基礎教養科目専門の教員も両学部を担当しており、情報交換もできている。

コミュニティケアに関しては、本年度は1年生が1科目しか受講していないが、2年生から本格的な教育が始まり、その教育の成果が上がり学生が関心を持つことにより、両学部の学生、教員が共有していきながら充実させていくことを考えたい。また、看護実践力のある学生の育成というカリキュラムの基本は両学部とも同じなので、「災害」「国際」関係カリキュラムを含めて充実させていきたい。

<佐々木看護学部長>

看護学部（広尾）でもさいたま看護学部のコミュニティケアに関する情報をもらいながら新しいカリキュラムを充実させるとともに、「災害」「国際」関係カリキュラムを特色としていきたい。

教員間では情報共有しながら課題解決を行っており、学生間では、例えば「赤十字」科目の演習等は、今後、両学部の学生が合同で参加できるようにすることを考えており、選択科目等でも検討していきたい。両看護学部のプログラムの連携を教育に活かすという視点は重要であるので、今後留意して考えていきたい。

<井村研究科長>

博士課程に在籍する学生は、教員になるため博士の学位が必須であることが強い動機付けとなっているが、教員や臨床に携わっている看護師等で仕事が優先となることや新型コロナウイルス感染症の流行で休学となること、家族の介護や体調不良となるなどの事情がある。

大学院としては改革を進めながら科目設定をしているが、研究の基礎を修士課程でしっかり修得できていない学生もおり、その基礎力を博士課程で充実させることは今後の課題であり、解決策として修士課程の履修指導を行うこと、今後の新しいカリキュラム改正に向けたプロジェクトチームでは、論文作成、研究方法、研究計画書作成への指導、研究プロセスの整備と支援等を検討している。

<江本図書館長>

電子ジャーナル等が毎年必ず高額化しており、毎年見直しをして購入数を減らしたりしている。大学院生の英語力の強化のためには英語関連誌を減らすことに葛藤がある。予算に限度があるなかで、パッケージで購入しなければならないものもあり、

他大学に聴きたいところである。

<西村委員>

パッケージの数を減らして購入するなどの対策や、様々な間接経費等を研究強化のために購入費に充てている。年単位くらいでジャーナルの経費が変動するので、これを見込んでいる。各大学が、例えばエルゼビア等にコストを抑えるように要求しているので、その回答を見て短期の購入計画を立てるという方法があるかと思う。

<高祖委員>

電子ジャーナルが値上がりしていくこと、他方で、その利用価値は高くなってきていることも事実であり、どのようにバランスをとっていくか悩ましい問題である。オンラインが展開してきた時代背景を含めて、複数の大学が同じものを利用できるような連携の仕組みをつくれないうるかと考えている。本学と日赤看護大学との間で履修単位の互換制度を導入できたが、両大学での教育分野が異なっており、図書利用の連携は難しいと思うが、複数の大学が同じものを利用する、多数の大学間でこのような連携をしていく時代がもうきていると思う。

(2) 自己点検・評価結果の反映等について<高祖委員>

私からの質問として、今回は内部質保証が大きなテーマとなっているかと思うが、それに関連して3点ほどある。質問をする前に、今日の説明を伺っていてコロナの流行という難しい環境の中で、きめ細かく、一人ひとりの学生を大切にする教育を展開していること、しなやかな芦のような強い看護師を育てるとの言葉もあり、非常に多角的に教育等を行っていることなど学ぶことが多かった。

事前に送付された2019年度年報にある内部質保証(第2章)には、「本学は学則に基づいて自己点検・評価を行っている。その方針は、本学の教育研究水準の向上を図り、本学の目的および社会的使命を達成するために、教育研究活動等の状況について自ら点検・評価を行い、その結果を公表することである。」旨が記載されているが、報告書には自己点検・評価が目的ではないこと、それを通していかに改善、改良をしていくための材料であることが所々に記載されている。そうすると自己点検・評価を行う方針というのも、それをして公表することが目的ではなく、むしろ自己点検・評価を行い改善、改良、その次にどうしていくか、その材料を得るといった総論的なところをしっかりと記載すべきであるというのが1点目である。

2点目は、教育課程・教育成果(第4章)に関連して、アセスメント・ポリシー、最近ではアセスメント・プランという言い方をしていることが多いが、例えば、事前に送付された事業計画書にも、筆記試験以外の多様な評価方法の採用を推進するとの記載があり、それではどういう配慮をしているのか聴きたいところである。また、

アセスメント・ポリシーを検討すると記載されているが、それが具体的にどうなったか教えてもらいたい。先程の説明にあったように、授業改善アンケート、教育評価アンケートは主観的なものである。アセスメント・ポリシー、アセスメント・プランというのは、教育の成果、DPの達成度をどういう基準で測っていくのかということを一学的に工夫していくという方針だと思うが、これらが今どのように行われているか質問したい。シラバスは、成績評価として授業出席、レポートについて何%ということが書かれているが、アセスメント・ポリシー、アセスメント・プランは、パーセンテージの問題ではなく、もう一步踏み込んで、レポートをどういう基準で評価するのかということになると思うので、アセスメント・ポリシーがどのように展開しているのが2つ目の質問である。

3つ目がポートフォリオの導入のことで、事業計画書では全科目でのポートフォリオの展開を検討していることが書いてあるが、ポートフォリオは一人ひとりの教育の成果、達成度を測るには時間がかかって大変だが、一人ひとりの成長度を測るにはよいものである。科目だけではなく、正課外の活動も取り込んで全体の成長度を測るとということが書かれているが、実際にどのように展開されているのか、私たちも悩んでいる部分でもあるので質問したい。

<守田学長>

質問を頂いた3点については、本学の課題というか弱みのところに関する意見、指摘と認識している。

自己点検に関しては、本学の認識としては、やっと4学年のデータが揃って分析ができる状況になってきたので、それを踏まえて改善プランを具体的に出し、それを実施してどうだったのかという本当の意味での評価、検証という仕組みが弱く、次の改良、改善に活かすための自己点検・評価という仕組みを回していくことに大いに課題があったということを実感している。去年、さいたま看護学部を開設したことを契機に、その仕組みが回るよう組織図の作成、各会議システムの立ち上げなどの意識付けをしながら、改善プランを出したりして少し実質的に動き始めた状況である。本学で試みた教育の実績を社会に公開することに課題があったことから、点検・評価結果を公表するという文言が先走ってしまったのかと振り返っているところである。

アセスメント・ポリシーについては、まだ公表しておらず、整備しなければならぬことから、どういう視点でアセスメントしていくかという方針と、教育、研究内容等についてのアセスメントの指標をリストアップし、意見交換、共有し、評価・検討、議論をして、表の整理をした段階である。まだ公表には至っていない。教員が認識をして評価の実質化、実態としてアセスメント・ポリシーに即した評価をしていく動きに関しては大きな課題と思っている。本年度進めたかったが、コロナ禍の影響もあり、停滞している状況である。

<佐々木看護学部長>

ポートフォリオについては、実習に関して既に始めているが、講義等を含めたものとして書式等を検討中であり、次年度から少しずつ導入することとしている。本学ではまだ紙媒体であり、学習支援システムに組み込んだ電子媒体で行っている大学があるが、少なくとも学生が自分の学習のことをファイリングしていけるようにし、実習は続けているが実習以外の講義、演習、サークル活動での学びなども書き込むようにして、学生がこれまで身につけられた内容、どこが課題なのか確認できるような仕組みづくりをしているところである。来年も少し課題もあるので、そのまま定着していけるのか、変更しながらということになるのか見通しがわからない部分の状況もある。

アセスメント・ポリシーについての課題があるが、本学のアンケートは学生の主観的なものが多く、大事だといわれる一方で、客観的なものでいうところもあり、I RとしてGPAを学生個々と全体を見ると、人体の構造、病気に関する科目、語学等学生の努力を要するネックとなる科目があること、1年生から4年間の学習成績にあまり変化がないことなどが見えてきた一方で、実習の成績は全体としてよい方向にあり、2、3年次のGPAが上がっていく傾向にあるという分析までは行っているが、これらを今後どのように活かすかが課題となっている。ご指摘のあった点は改善を要すると思っている。

<高祖委員>

学生たちの声を様々な手法で集めることがよくできていること、大学運営についても学生たちの声を活かしていこうという取り組みは素晴らしいと思う。

ポートフォリオについては、先生方がつくるという面もあるが、自分の歩みを作っていく、例えば学生がレポートを書いたり、大学院生が研究テーマを見つけていったりするために、学生たちが自分の成長の歩みをつくっていく仕組みと合わせることができれば、先生方の負担も過重にならなくて済むのかと思う。

(3) 大学教育と卒後の病院との連携及び地域連携について<川上委員>

私が臨床の立場で感じていることは、大学等で看護の基礎を学び当院に就職した看護師と臨床との繋ぎをどのようにしていくかが課題である。高祖学長が言っていたように、大学教員とともにしなやかな芦のような看護師を育てないと今後の世の中はやっていけないし、病院には当センターのような急性期の病院もあれば、地域に根付いた地域包括を持っているところとか色々あるが、患者さんが目の前にいるのは変わらないので、臨床の現場では学生とは違い、社会人として育てていかなければならない。これからは、コロナの時代を生き抜いた学生たちを医療現場に受入れている

くなかで、何に注意していかなければならないのかいろいろ検討してきたが、小宮先生も言っていたとおり、やはり看護実践力の高い人材を育てるため、臨床と大学の教員の連携が必要であり、現場を知って伝えていくところで今後もシームレスな教育体制、しなやかな芦の研究活動を引き続きやっていきたい。質問として、何か今後につながる考えがあれば聴かせてほしい。

また、氷川地区の防災訓練、広尾中学校への訪問について説明があったが、聖心女子大学、國學院大學、渋谷区保健所等地域を巻き込み、次年度以降にでも大学と共同で発信できるものがあればよいと思うので、議論していきたい。

<守田学長>

大事な指摘を頂いたので、次年度の計画に加えることとする。また、目先のことになるが、コロナ禍で卒業して新人看護師となっていく状況をどのようにするかということ、地域住民への発信に関して、今後、具体的に共同してやっていけたらと考えているので宜しくお願ひしたい。

<鈴木委員長>

日赤医療センターの図書等を学生が利用できるようにするとか、お互いに共同利用を考えることは大事かもしれない。コロナ禍の時代となり看護師の需要は高く、自分で判断できる看護師を育てていくことが大事である。

本日は各委員から非常によい発言があったが、最後に渋谷区保健所の阿部所長に発言願ひたい。

<阿部委員>

本日は大学での工夫、研究者を育てる取組みなど多くのことを学ばせて頂いた。私どもは地域保健を担っていくうえで感じるのは、割と医師会、歯科医師会、薬剤師会の先生方と連携することが比較的多いが、看護の力が保健行政を進めていくためにはどうしても必要なので、今日の説明で先生方の活躍、地域のコミュニティを大事にしていることを改めて確認できたことから、渋谷区のと取組みとも一緒に相談しながらできないかと思ったので、今後とも宜しくお願ひしたい。

IV. まとめ

<鈴木委員長>

内容は非常に多岐にわたっていたが、前向きに考えられている。各委員のよい質問があり、それを踏まえて今後の大学運営を進めていけたらよいし、近隣大学等地域を含めた渋谷区全体で、お互いのネットワークについてこれから考えて、その総合力でしっかりとコミュニケーションがとれる、自分で判断できる看護師が育っていくことを期待している。本日は非常によい会であったと思う。

時間となったので、これで委員会を終了する。

<守田学長>

皆さんお忙しいなか、この委員会を計画させて頂いたが、開催できて本当によかったと思っている。非常に大事な意見、指摘を頂戴したことを踏まえ、本学のよりよい教育ができるよう尽力していきたい。本日は第1回目の委員会であったが、今後も本学を見守り続けて頂き、次年度に向けても協力をお願いしたい。感謝申し上げます。